



TITLE:

シスモンディの経済学 - マクロ動 学による分析 -

AUTHOR(S):

堂目, 卓生

CITATION:

堂目, 卓生. シスモンディの経済学 - マクロ動学による分析 -. 経済論叢
1988, 141(2-3): 143-160

ISSUE DATE:

1988-02

URL:

<https://doi.org/10.14989/134227>

RIGHT:

經濟論叢

第 141 卷 第 2・3 号

予算過程とコーディネイター	池 上 惇	1
産業構造分析と経済発展	瀬地山 敏	12
ワイマール期財政調整と邦財政高権（下）	武 田 公 子	41
シスモンディの経済学	堂 目 卓 生	61
内部補助をめぐる若干の考察	森 統	79
軍事技術の概念規定に関する一考察	阪 部 有 伸	100

昭和 63 年 2・3 月

京 都 大 学 経 済 学 会

シスモンディの経済学

——マクロ動学による分析——

堂 目 卓 生

I 序 論

シスモンディは、主著『経済学新原理』において、継続的な経済成長を可能にする生産と消費のバランスをマクロ的に分析しようと試みた。彼は、『新原理』の第2編第6章「消費による生産の、また所得による支出の相互決定」の中で次のように述べる。

「国富は、その増進にさいして、一つの円環運動をおこなう。それぞれの結果はつぎには原因となり、それぞれの歩みはそれに先行する歩みによって規制され、それにつづく歩みを決定する。そして最後の一步は最初の一步を同じところに連れ戻す。国民所得は国民支出を規制しなければならず、国民支出は生産の総体を消費ファンドに吸収しなければならない。完全な消費は等しい、あるいはより大きい再生産を決定し、この再生産から所得が生まれる。急速で完全な消費がつねにより大きい再生産を決定するならば、そしてまた相互に関係する富の他の部分が同じ歩調でこの運動にしたがい徐々に増加しつづけるならば、国富は増大し、国家は繁栄しつづける。だが、これらの間の比例が破れるやいなや、国家は衰滅する。」¹⁾

シスモンディは、抽象的な富の運動を理論的に取り扱いながら、資本制経済の現実、すなわち生産過剰および経済恐慌を説明することに関心を寄せた。生産過剰および恐慌に関するシスモンディの記述を紹介し評価した研究は多いものの、富の運動に関するシスモンディの議論を、理論的、体系的に分析する研

1) Sismondi [9], 初版, p. 112.

究は少ない²⁾。本稿の第一の目的は、シスモンディが論理的に取り扱った富の円環運動を、マクロ・モデルを用いて体系的に再構成することにある。そして第二の目的は、そのモデルを発展させることによって、資本制経済に対するシスモンディの議論が整合的に説明されることを示すことである。

シスモンディは、生産—所得—消費のタイム・ラグを含んだ異時的関係を明確に認識し、セー法則における同時的關係とは分析的に異なる方法をとった。けれども、この異時的関係は、「所得」という用語をシスモンディが曖昧に用いたため、これまでは正確に把握することが困難であると考えられてきた³⁾。次節では、マクロ経済における生産—所得—消費の異時的関係をシスモンディの記述に従って整合的に検討する。そこでは、経済に対するシスモンディのマクロ的、構造的接近方法が明らかとなるであろう。

第3節では、第2節で得られたマクロ的枠組を用いて、定常成長経済における生産過剰の可能性が示される。シスモンディは、生産過剰を資本制経済の避けがたい現象として捉えた。しかしながら、彼は、そのマクロ的枠組から生産過剰の必然性を論理的に展開するのに成功したとは言えない。第3節では、生産過剰を均衡価格が期待価格を下回る現象として捉えることにより、シスモンディの結論を理論的に裏付ける試みがなされる。

第3節における分析が定常成長経路の比較であるのに対し、第4節では、雇用調整関数の導入によって、より動学的な分析がなされる。そこでは、生産過剰によって引き起こされる恐慌が、経済変動の一局面として示される。そして最後に、シスモンディが資本制経済において、継続可能と考えた定常成長率が示される。

II 所得、支出、生産の相互関係

2) Parguez [7][8]は、シスモンディの体系を、ラグを含んだマクロ・モデルによって扱うことを試みた。しかし、彼のモデルは、シスモンディの生産—所得—消費の相互関係を整合的に示しているとは言えない。

3) Sowell [13]は、シスモンディの所得の概念を把握することが困難であるとする。

シスモンディの経済学を理解する上で、所得の概念は非常に重要である。しかしながらシスモンディは、『新原理』の中で所得という用語を様々な意味で用いている。例えば、所得が国民所得を意味することもあれば、利潤所得を意味することもあり、さらに利潤のうち消費にあてられる部分を意味することもある⁴⁾。シスモンディは、国民所得を次のように二分する。

「国民所得が、一つは過去に属し、他は現在に属する、あるいはそう言いなければ、一つは現在に属し他は未来に属する二つの量から構成されていることにも注意しなければならない。一つは富の利潤であって、それは現に消費しようとする者の手中にある。そしてそれは前年におこなわれた労働の結果として生ずる。他は労働する意志と力であって、それは労働する機会があり、労働力が同時に消費対象物と交換されるのに応じてはじめて現実の富となるにすぎない。」⁵⁾

いま t 期の名目国民所得を Y_t 、消費にあてられる利潤所得を Y_t^P 、労働者の貨幣所得を Y_t^L とするならば、シスモンディの国民所得は次のように示される。

$$Y_t = Y_t^P + Y_t^L \quad \dots\dots(1)$$

シスモンディは、労働者は彼の所得 Y_t^L を超えて支出することはできず、さらに、「社会的支出全体は、社会的所得によって規制される」と考える⁶⁾。 t 期の国民支出を E_t とするならば、 E_t は Y_t を超えることはできない。そして、生産者および労働者の所得が全て支出されるならば⁷⁾、

$$E_t = Y_t \quad \dots\dots(2)$$

が成り立つ。 E_t は t 期の国民支出であるとともに、販売者（または生産者）にとっては今期に供給する生産物と交換に得られる報酬の総額である。

4) Sismondi [9], 初版, pp. 84-127.

5) *Ibid.*, p. 106.

6) *Ibid.*, p. 114.

7) シスモンディは、所得として得られた貨幣が退蔵される可能性をもつことを、明示的には述べていない。

いま、シスモンディの仮定にしたがって、外国貿易および地代所得の存在を捨象し⁸⁾、さらに、消費財のみが労働のみによって生産される経済を考えよう。

消費にあてられる利潤所得 Y_t^P は、前期の販売の成果によって与えられなければならない。故に、 Y_t^P は次式によって定義される。

$$Y_t^P = E_{t-1} - Y_{t-1}^L \quad \dots\dots(3)$$

すなわち、今期に生産者が消費できる所得は、前期の販売による報酬 E_{t-1} から前期に支払われた労働者への前払い（流動資本） Y_{t-1}^L を差し引いた残余である。

労働者の所得 Y_t^L は、今期に支払われる賃金前払いの総額を意味するものであるから、 t 期の貨幣賃金率を w_t 、雇用量を N_t とするならば、

$$Y_t^L = w_t N_t \quad \dots\dots(4)$$

によって示される⁹⁾。労働者は、今期首に与えられた賃金によって消費財を購入しながら、来期の市場に供給される生産物 Z_{t+1} を生産するのである。したがって、一次同次の生産関数を仮定し、労働生産性を a とするならば、今期の市場に供給される生産物は、次式のように表わされるであろう¹⁰⁾。

$$Z_t = a N_{t-1} \quad \dots\dots(5)$$

(5)式は、今期の市場に供給される生産物が前期の労働の成果であることを示す¹¹⁾。

生産物 Z_t を供給する生産者が市場において直面する需要総額は、 E_t である。重要なのは、需要額 E_t が生産量 Z_t によって決定されたのではなく、それとは独立に導びかれている事である。シスモンディがセイやリカードの販路説に行った批判は、まさにこの点にある。シスモンディは次のように述べる。

「彼ら（セイおよびリカード）が陥っている誤謬は、まったく、つぎの誤

8) *Ibid.*, p. 80, pp. 103-104.

9) 生産者は賃金前払いを信用創造によって支払うものとする。労働者が貨幣を退職しない限り、賃金前払いは必ず回収される。

10) 本稿では、シスモンディが考える分業による内生的技術進歩、および外生的技術進歩を考慮に入れず、雇用増加による富の増大のみに論点を絞る。

11) *Ibid.*, p. 106.

った原理、すなわち彼らの目から見れば年生産は所得と同じものである、という原理にもとずいている。」¹²⁾

「生産それ自体が所得なのではない。生産が所得と呼ばれ、所得として働くのは、生産が実現した後のことであり、各生産者がそれを必要とし求めている、そしてそれを流通から引き上げて消費ファンドに入れ、交換にその価値を与える消費者を見出した後のことである。このときになって始めて、生産者は計算をおこない、彼がいまおこなった交換からまず自分の資本全体を引き出す。ついで彼に残されている利潤を見出し今度は自分の愉楽に備える。そして活動を再開する。」¹³⁾

生産者は生産物と交換に実現した報酬 E_t から彼の総利潤 Π_t および利潤率 r_t を計算する。それらは、各々、次のように求められる。

$$\Pi_t = E_t - w_{t-1}N_{t-1} \quad \dots\dots(6)$$

$$r_t = \Pi_t / (w_{t-1}N_{t-1}) \quad \dots\dots(7)$$

$w_{t-1}N_{t-1}$ は、生産物 Z_t を生産するのに生産者が労働者に支払った賃金費用である。

一方、需要者は支出 E_t と交換に、生産物を獲得する。シスモンディによれば、獲得された生産物、すなわち、

「各人が欲求を満たすために充てるあらゆる諸物、彼にとってもはや再生産されることのない、そして自分の所得と引換えに購入したあらゆる諸物の全体は、消費ファンドの名で呼ばれる。」¹⁴⁾

ここで、われわれは、消費ファンドが年生産物を全て吸収するかどうか、という問題に遭遇する。シスモンディは吸収されない可能性を次のように認める。

「もし年所得が年生産物の総体を購買しないならば、この生産物の一部は売れ残り、生産者の倉庫を塞ぎ、彼らの資本を麻痺させ、そして生産は停

12) *Ibid.*, p. 341.

13) *Ibid.*, p. 121.

14) *Ibid.*, p. 94.

止するであろう。』¹⁵⁾

シスモンディは、潤滑な再生産のためには「国民支出は生産の総体を消費ファンデに吸収しなければならない。』¹⁶⁾ と考える。しかしながら、国民支出 E_t が国民生産物 Z_t を全て購入するかどうかという問題は、成立する平均物価水準と切り放して考えることはできない。平均物価水準 P_t が次のような水準に定まる時、すなわち、

$$P_t = E_t / Z_t \quad \dots\dots(8)$$

が成立するならば、年生産物は全て購入される。シスモンディは、売れ残りの可能性を認めつつも、他方で、アダム・スミスの伝統に従って、市場における価格の調整機能を信頼する。彼は、市場価格（彼が購買者の価格と呼ぶもの）が競争によって、需要と供給が均衡するように定まると考える¹⁷⁾。そして生産過剰がある場合、生産者は、

「生産物価格の下落を通じて、より大きな消費をひきおこす。だが、その結果はとくに有利というわけではない。……富者は、あまり欲しくないものを安く手に入れて、消費者としては儲けたと思うであろうが、富者のなかには生産者もまたいるのであって、生産者としては、彼らは、儲けた以上に損をすることになるであろう。』¹⁸⁾

シスモンディは、年生産物 Z_t が、平均物価水準の調整を通して、年支出 E_t によって全て購入される可能性をも認めていると言ってよい。そこで本稿では、平均物価水準 P_t は(8)式によって均衡水準に決定されると仮定し、さらに、生産過剰の定義を次式の関係に還元して考えることにする。

$$P_t < P_t^* \quad \dots\dots(9)$$

P_t^* は生産者が今期首に期待した今期の平均物価水準を表わす。(9)式によって、生産過剰は、「今期に成立する物価水準が、生産者が期待した水準よりも

15) *Ibid.*, p. 106.

16) *Ibid.*, p. 112.

17) *Ibid.*, pp. 312-313.

18) *Ibid.*, pp. 117-118.

低くなる状態」として定義される¹⁹⁾。

(1)～(5)式を(8)式に代入することによって、物価水準 P_t は次のように示される。

$$P_t = \frac{E_{t-1} - Y_{t-1}^L + w_t N_t}{a N_{t-1}} \quad \dots\dots (10)$$

いま、 t 期における雇用の増加率を n_t として与えるならば、

$$N_t = (1 + n_t) N_{t-1} \quad \dots\dots (11)$$

という関係が示される。 $E_{t-1} = P_{t-1} Z_{t-1}$ であることを考慮し、さらに、(10)式に(11)式の関係を導入するならば、次式が求められる²⁰⁾。

$$P_t = \frac{a P_{t-1} - w_{t-1} (1 + n_{t-1}) + w_t (1 + n_t) (1 + n_{t-1})}{a (1 + n_{t-1})} \quad \dots\dots (10')$$

(10')式より、今期の均衡物価水準 P_t は、前期および今期の貨幣賃金率と雇用増加率、そして前期の物価水準に影響を受けると言える。(10')式は、シスモンディの生産—所得—消費の異時的関係を整合的に構成することによって示されるマクロ的、構造的な枠組であると言ってよい。

III 定常成長経済における過剰生産の必然性

本節では、制度的要因および生産者の行動を特定化することによって、前節で得られた構造的枠組を発展させ、定常成長下における生産過剰の可能性を検討する。

まず貨幣賃金率の決定について考えよう。シスモンディは、過剰な労働人口が存在する経済において、労働者の立場は常に不利であると考える。

19) 吉田 [15] は、生産過剰による生産者の損失が「所得の増大が期待を下回る」状況として捉えられることを示す。シスモンディが、生産者の行動に何等かの期待形成を含ませていたことは、次の叙述から明らかである。

「彼（生産者）が正当な動機もなしに命じた労働の生産物は、売れないか、あるいは売れ行きが悪いであろう……こういう場合には、彼がそれに期待した利潤は、翌年には減少しているか、あるいは損失にさえなっているだろう。」(Sismondi [9], 初版, pp. 108-109)

20) $E_{t-1} = P_{t-1} Z_{t-1} = P_{t-1} a N_{t-2}$, $Y_{t-1}^L = w_{t-1} N_{t-1} = w_{t-1} (1 + n_{t-1}) N_{t-2}$, $w_t N_t = w_t (1 + n_t) (1 + n_{t-1}) N_{t-2}$, $a N_{t-1} = a (1 + n_{t-1}) N_{t-2}$ を(10)式に代入することによって、(10')式が求められる。

「自分の腕以外の所得をもたず、そして仕事を求める者の数が、たえず増大するため、彼らは、ますます、提供される仕事なら何でも引受け、課せられた条件には服し、賃金をまったくの必要最低額に切下げざるをえなくされたのであった。」²¹⁾

「その結果、資本家と労働者の多かれ少なかれ不平等な分配、資本家が労働者にたいして生活を維持するのにぎりぎり必要な分しか残さないように努め、しかも労働者が生命の価値を超えて生産したもののいっさいを自身のために留保するような分配が生ずる。」²²⁾

したがって、労働人口が過剰である経済を考え、貨幣賃金率 w_t が生産者によって次のように定められると仮定しよう。

$$w_t = \alpha P_t^e \quad (\alpha < a) \quad \dots\dots (12)$$

α は、生産者が労働者に与えてもよいと考える必要最低限の消費財の量を表わし、それは労働者が一期間に生産する消費財の量 a よりも小さいものとする。 α に今期の期待物価水準 P_t^e を乗じた額が今期首に前払いされる貨幣賃金率となる。

生産者が今期首に予想する物価水準 P_t^e は、実際に成立する均衡物価水準 P_t に必ずしも一致するものではない。なぜなら、生産者は今期の消費支出の E_t の大きさを知ることとはできないからである。シスモンディは、このような販路に対する不確実な認識こそが、交換の発達した資本制経済の特徴であると考える。彼は次のように述べる。

「各人が全員のために労働するようになって以来、全員の生産は全員によって消費されなければならなかった。そして、各人は、生産にあたって、自分の労働の成果が充たすはずの社会の最終需要を考慮しなければならなくなった。この需要は彼には不完全にしか知られず、しかも限られていた。」²³⁾

21) Sismondi [9], 初版, p. 92.

22) *Ibid.*, p. 103.

23) *Ibid.*, p. 84.

しかしながら、シスモンディは、市場で既に成立した購買者の価格が一つの手掛りを与えると考ええる。

「市場の変動を正確に認識し、計算することは難しい。各生産者には、彼と競争している他の商人、つまり彼の競争者の数や資力が十分わかっていないために、彼にとっての曖昧さはますます大きくなる。しかし唯一つのことの観測が、他のいっさいの代りとなる。それは、彼の価格と購買者の価格との比較である。」²⁴⁾

「彼の価格」すなわち販売者の価格とはシスモンディにとって自然価格を意味し、それは生産費から導かれる。本稿のモデルでは、販売者の価格 P_t^s は、次式によって求められる。

$$P_t^s = (1+r_n)w_{t-1}/a \quad \dots\dots(13)$$

r_n は生産者に同一規模の生産を繰り返させる利潤率であり、外生的に与えられるものとする。したがって、 P_t^s は生産者にとって既知の価格である。一方、今期首、生産者に知られている購買者の価格は、 P_{t-1} , P_{t-2} , P_{t-3} , ... という過去に市場で成立した価格である。シスモンディの観点をさらに発展させるならば、今期の需要に対する予測、したがって期待物価水準 P_t^e はこれらの価格に影響を受けると考えられる。故に次の関係が与えられる。

$$P_t^e = f(P_{t-1}, P_{t-2}, P_{t-3}, \dots) \quad \dots\dots(14)$$

われわれは、ここで(14)式の最も単純なケース、

$$P_t^e = P_{t-1} \quad \dots\dots(14')$$

を仮定し、定常成長経済（すなわち $n_t = n$ ）における期待物価水準 P_t^e と均衡物価水準 P_t との関係を考えることにしよう。

(12)式及び(14')式の関係を(10')式に代入し、さらに $n = n_t = n_{t-1}$ とするならば、次式が得られる²⁵⁾。

$$\frac{P_t}{P_t^e} = \frac{a + \alpha(1+n)^2}{a(1+n)} - \frac{\alpha}{a} \cdot \frac{P_{t-1}^e}{P_{t-1}} \quad \dots\dots(15)$$

24) *Ibid.*, p. 306.

25) $w_{t-1} = \alpha P_{t-1}^e$, $w_t = \alpha P_t^e = \alpha P_{t-1}$, $n_{t-1} = n_t = n$ を(10')式に代入すると(15)式が得られる。

$P_t/P_t^e = X_t$ と置くならば, (15)式は次のように示される。

$$X_t = \frac{a + \alpha(1+n)^2}{a(1+n)} - \frac{\alpha}{a} \cdot \frac{1}{X_{t-1}} \quad \dots\dots(15')$$

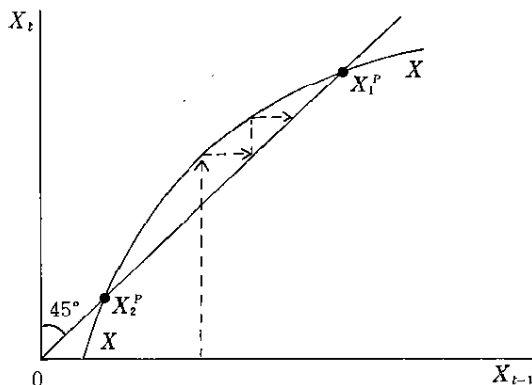
X_t は, t 期の均衡物価水準 P_t と期待物価水準 P_t^e の比率であり, (9)式で示される定義から, 生産過剰の程度を表わす変数であると考えてよい。特に $X_t < 1$ である場合, t 期の市場に供給された年生産物は過剰であると言える。

(15')式は, 〈図1〉において XX 曲線として示される。 XX 曲線と 45° 線との交点 X_1^P および X_2^P は, (15')式における二つの特殊解に対応する²⁶⁾。図から明らかなように, 二つの交点のうち, より上方の交点 X_1^P が安定的である。安定的な特殊解を X^P とするならば, X^P は次のように定められる。

$$n \leq \sqrt{a/\alpha} - 1 \text{ のとき} \quad X^P = \frac{1}{1+n} \quad \dots\dots(16)$$

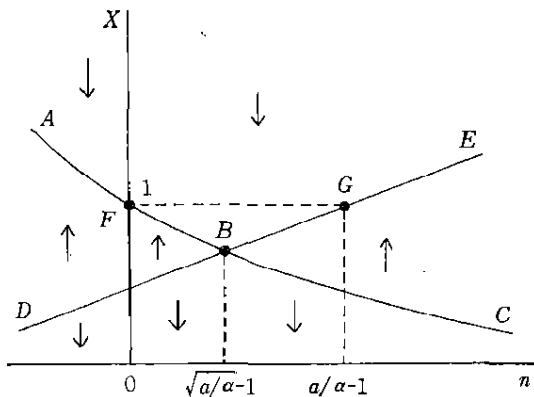
$$n > \sqrt{a/\alpha} - 1 \text{ のとき} \quad X^P = \frac{\alpha}{a}(1+n)$$

〈図1〉を $n-X$ 平面に変換すると 〈図2〉 のようになる。〈図2〉において, 曲線 AC は $X=1/(1+n)$ を, 直線 DE は $X=\alpha(1+n)/a$ を表わす。(16)の関係から, 安定的な特殊解 X^P と雇用成長率 n の組み合わせは, 屈折曲



〈図1〉

26) (15')式に $X_{t-1}=X_t$ の関係を代入して求められる解のことである。



〈図2〉

線 ABE によって示される。また、これらの曲線以外の点は、時間の経過とともに図中の矢印の方向に従って移動する。

屈折曲線 ABE 上で、 $X \geq 1$ すなわち $P_t \geq P_t^*$ に対応する成長率は、 $n \leq 0$ 、または $n \geq a/\alpha - 1$ であり、年生産物が過不足なく年支出に吸収され続けるのは、成長のない経済 (F 点)、あるいは成長率が $a/\alpha - 1$ である経済 (G 点)に限られる。そして、成長率がこれら二点の間にある定常成長経済は、究極的には生産過剰を避けられないと言える。

シスモンディは、資本制経済が究極的には生産過剰の弊害を必ず伴う制度であると確信し、急速な経済成長に否定的な立場をとる。

「もし生産が徐々に増大するならば、それが将来の生活状態を良くすると同時に、毎年の交換が僅かな損失をわき起こすにちがいない。もしこの損失が軽微でうまく配分されているならば、各人は自分の所得について不平を鳴らすこともなくこの損失に耐えるであろう。国民経済はまさにここにこそ成り立つのであって、この僅かな犠牲が資本と公共の富とを増大させるのである。しかし、もし新しい生産と先行する生産との間に大きな不均衡が存在するならば、資本は破損され、苦境が生じ、国民は進歩するど

ころか退歩する。』²⁷⁾

シスモンディは、損失があまりに大きな経済成長は維持されることができず、雇用労働者の解雇および生産の縮小（または停止）等の社会的災厄を引き起こすと考えた。〈図2〉を用いるならば、彼は X の値があまりにも小さくなるような成長経済は、いずれ $n < 0$ の領域に陥る可能性をもつと考えたのである。

しかしながら〈図2〉において、雇用増加率 n が $\sqrt{a/\alpha} - 1$ を上回る場合、経済成長率が高ければ高い程、 X の究極的な値も大きくなり、さらに n が $a/\alpha - 1$ を上回るならば、経済は、過剰生産ではなく、過少生産の状況に落ち着くことが示される。従って、われわれのモデルにおいて、シスモンディの過剰生産に関する議論が厳密に正当化されるためには、雇用増加率について、 $0 < n < \sqrt{a/\alpha} - 1$ という条件が満たされなくてはならない²⁸⁾。

次節では、シスモンディが資本制経済において継続可能と考えた定常成長率をより具体的に求め、それ以外の成長がどのように変化するかを検討する。

IV 経済変動と恐慌

前節において、シスモンディが認識した資本制経済の根本的問題は、定常成長 ($n_t = n$) を仮定し、成長率の違いによる究極的な状態を比較することによって検討された。しかしながら、生産者は雇用増加率を一定に保つのではなく、販売の結果によってそれを変化させると考えるほうが、より厳密であろう。シスモンディ自身、生産者の行動について次のように述べる。

「もし利得が平均率を上回って上昇するならば、生産者はその企業を拡張し、新たな働き手と新たな資本とを投下するであろう。……もし逆に、生産者が必要とした全回収額を償うにはあまりにも低い価格を、購買者が支

27) *Ibid.*, pp. 120-121.

28) 労働生産性 a が、生産者が労働者に与えてもよいと考える一人当たり消費財量 α と比べて非常に大きいならば、雇用増加率 n が $a/\alpha - 1$ を上回ると仮定することは現実的ではないであろう。

また、直線 DE より下側の領域においては生産者の消費が負となり、経済的意味がないことがわかる。なぜならば、 $Y_{t+1}^p = P_t Z_t - w_t N_t = P_t \{X_t a - \alpha(1+n_t)\} N_{t-1}$ より、 $Y_{t+1}^p \geq 0$ であるためには、 $X_t \geq \alpha(1+n_t)/a$ が満たされなくてはならないからである。

払うことになれば、生産者はその生産を縮小しようとするであろう。²⁹⁾

本節では $n_t = n$ という仮定に代わって次のような雇用調整関数を考え、シスモンディの議論を経済変動の側面から、より動学的に検討しよう。

$$n_t = g(r_t^e), \quad g' > 0, \quad g(r_n) = 0 \quad \dots\dots(17)$$

(17)式は、今期の雇用増加率 n_t が今期の期待利潤率 r_t^e に正の影響を受けることを示す。 r_n は(13)式で販売者価格を定義するのに用いた自然利潤率である。(17)式より、生産者は、今期の利潤率が自然利潤率を上回ると予想する場合に今期の雇用を増加させ、下回ると予想する場合には、それを減少させる。

ところで、今期の期待利潤率 r_t^e は、前期の生産過剰の度合 X_{t-1} によって、次のように表わされる³⁰⁾。

$$r_t^e = aX_{t-1}/\alpha - 1 \quad \dots\dots(18)$$

したがって、雇用調整関数(17)式は、次のように書き換えられる。

$$n_t = h(X_{t-1}), \quad h' > 0, \quad h(X_n) = 0 \quad \dots\dots(17')$$

ただし X_n は、 $\alpha(1+r_n)/a$ に等しい。

ところで、(15)式を $n_t = n_{t-1} = n$ の仮定を外して示すと次式のようになる。

$$X_t = \frac{a + \alpha(1+n_{t-1})(1+n_t)}{\alpha(1+n_{t-1})} - \frac{\alpha}{a} \cdot \frac{1}{X_{t-1}} \quad \dots\dots(15'')$$

(15'')式より、今期の雇用増加率 n_t の上昇は、 X_t を上昇させることがわかる。(15'')式および(17')式から定常的な n と X が求められる。(17')式の雇用調整関数を〈図3〉の NN 曲線のように表わすならば、定常的な n と X の組み合わせは、 NN 曲線と ABE 曲線の交点 S によって示される³¹⁾。交点 S は、「僅

29) *Ibid.*, p. 307. しかしながらシスモンディは、生産の縮小が拡大と比べて、容易でないことを強調する。

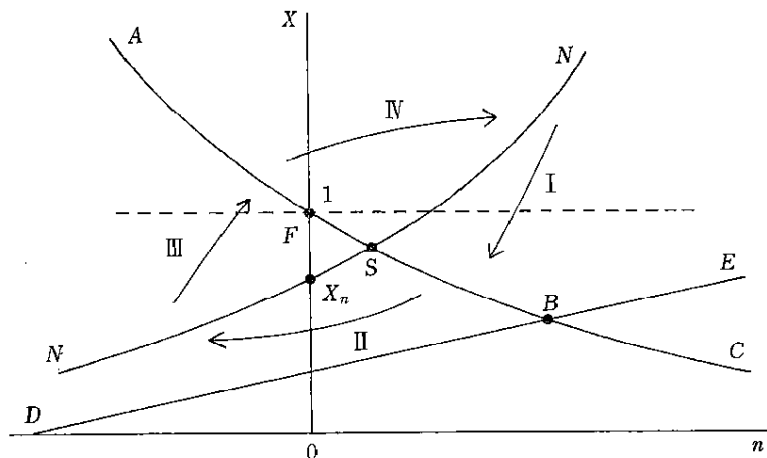
30) 今期の期待利潤率 r_t^e は、 $(P_t^e Z_t)/(w_{t-1} N_{t-1}) - 1$ と定義される。故に、 $r_t^e = (P_t^e a)/(P_{t-1}^e \alpha) - 1 = aX_{t-1}/\alpha - 1$ が求められる。

31) 〈図3〉の NN 曲線は、屈折曲線 ABE のうち、 AB の部分と交わるように描かれている。生産者の雇用増加に対する意欲が非常に強いならば NN 曲線は BE のところでも交わる可能性を持つ。しかしながら、そのような無限弾力的な雇用増加意欲は、現実的であるとは言えない。

また、〈図3〉の NN 曲線は、 $X_n < 1$ を仮定して描かれている。もしも $X_n > 1$ を仮定するならば、均衡点 S は、正の成長経済においては見つけられないであろう。

かな損失」がうまく配分されながら定常的に成長できる状態である。 S 点においては、経済の「円環が拡大し、螺旋状に変わりうる」ような生産と消費のバランスが維持されていると言える³²⁾。

一方〈図2〉および(15')式における n_t と X_t の関係から、点 S 以外にある n_t と X_t の組み合わせは、時間の経過と共に〈図3〉の矢印のように変化するであろう³³⁾。〈図3〉において、Iは経済が $n > 0$, $X > 1$ という好況から、 $n > 0$, $X < 1$ という不況に転ずる局面を示し、IIは経済が不況から、 $n < 0$, $X < 1$ という恐慌状態に陥る局面を示す。IIIは恐慌状態の緩和およびそれに続くインフレ的な状況を示し、IVは経済が成長を再開する回復の局面を表わす。定常均衡点 S 以外にある経済は、このようにして成長と衰退、好況と不況を繰り返



〈図3〉

32) *Ibid.*, p. 119.

33) 〈図2〉の矢印は、生産者が雇用増加率 n_t を変化させない場合の X_t の変化の様子を示す。一方、(15')式より、 n_t の変化は X_t に正の影響を与えることがわかる。これらの動きを総合すると、 n_t と X_t の組み合わせは、変化の方向によって、〈図3〉のI—IVの領域に分けることができる。領域Iは、 X の下落傾向と、 n の低下による X の一層の下落を表わす。領域IIでは、 X が上昇傾向に転じて n の低下による X の下落を陵駕し、さらに領域IIIでは、 n が上昇に転じて X の上昇を加速する。領域IVは、 X が再び下落傾向に転じて、 n の上昇による X の上昇を陵駕する様子を示す。

すことが示される。

シスモンディは、経済変動を資本制経済に特有の現象であると考えた。そして次のように述べる。

「生産、所得、消費間の相互関係における攪乱は、生産が通常よりも少ない所得を与えるにせよ、資本の一部が消費ファンドになるにせよ、逆にこの消費が減少してもはや新たな生産を喚起しないにせよ、国民にとってひとしく有害となることがわかる。国内に苦境が生ずるためには、均衡が破られるだけで十分である。」³⁴⁾

シスモンディは、特に生産が縮小される局面（すなわち $n < 0$ の領域）が社会にとって有害であると考えた。なぜなら、それは「期待される効果を生むまえに長い苛酷な苦境を政治全体にわき起す」³⁵⁾ からであり、職を失う労働者が最大の犠牲者となるからである。シスモンディが政府の介入を要請したことの一つは、このような局面における労働者への保護であった。

均衡点 S が、安定的であるかどうかは ABE 曲線と NN 曲線の形状と位置とに依存する。 S 点が安定的であるならば、 S 点以外にある経済は、変動的成長から定常成長へと移行するであろう。反対に、 S 点が不安定であるならば、経済はその変動の度合を増して、ついには破綻するであろう。シスモンディは、経済が破綻を免れ、究極的には均衡を回復する可能性を認める³⁶⁾。しかしながら、たとえ均衡点 S に経済が収束したとしても、成長 ($n > 0$) と過剰生産 ($X < 1$) の併存という資本制経済の根本的な不調和は解決されない。シスモンディが『新原理』で明らかにしようとしたのは、資本制経済における不調和の必然性と、その不調和が引き起こす災厄の可能性であると言ってよい。

V 結 語

本稿では、まずシスモンディの記述に従って、生産—所得—消費のマクロ的

34) *Ibid.*, pp. 121-122.

35) *Ibid.*, p. 307.

36) *Ibid.*, p. 123.

関係を整合的に再現し、次に賃金決定および生産者の期待形成の様式を特定化することによって、シスモンディの生産過剰論がいかにそのマクロ的枠組から導かれ得るかを示した。そして最後に雇用調整関数の導入によってシスモンディの最適成長率を明示化するとともに、彼の恐慌論が経済変動の一局面として捉えられることを示した。シスモンディの経済学に対するこのような体系的な接近は、従来のシスモンディ研究には見られない試みであると言ってよい。

本稿のモデルは、財の需給に関して均衡論的な取り扱いをしたが、このことはシスモンディの分析方法に必ずしも背反するとは言えない。なぜなら、シスモンディは市場の価格調整メカニズムを積極的に否定しておらず、むしろ、商品の価値が市場において抽象的に、そして常に変動的に決定される仕組を交換経済の特徴と考えるからである³⁷⁾。

資本制経済に対するシスモンディの批判はもっと根本的なところにある。彼は、資本制経済を独立小生産者経済と比較することによって相対的に捉え、前者がいかに不調和を内包した過渡的な経済体制であるかを示そうとした。そして、彼の批判的となった学説は、資本制経済を完成された調和的な体制として捉え、それに完結した体系を与えたリカードの経済学である。資本制経済が自然資源、人間の能力、国による生産要素の特性等が最大限に引き出される定常状態に向って調和的に発展するというリカードの考え方は、シスモンディにとって楽観論であり、空想論である。さらに、シスモンディと同様な過少消費説の立場を取るマルサスの経済学も、シスモンディの目から見れば、リカードの調和的発展論の補完者であるに過ぎない。シスモンディは、マルサスと違って、公共支出によって資本制経済の矛盾が修正されるとは考えなかった³⁸⁾。したがって、シスモンディと比べるならば、マルサスは、リカードの定常状態に

37) Grossman [3]は、この点をシスモンディの考え方の中心と見る。

38) シスモンディは、過少な消費需要は地主階級および政府の不生産的消費の増加によって補われるべきだというマルサスの提案を、「いささか奇妙な結論にたどりついた。」(Sismondi [12], I, p. 43) と批評する。一方、マルサスは、労働者に対する保護権力として政府の介入を要請するシスモンディに同調しないと述べる。(Malthus [5], 第2版 p. 366)

行き着くために必要な修正を示したのであり、その意味でリカード体系の枠内に位置すると言ってよい³⁹⁾。

シスモンディは、リカードの経済学に対する、あるいは19世紀初頭の正統派経済学に対する最大の批判者であったと言える。シスモンディが目指したことは、資本制経済を理論的かつ実証的に説明するための、正統派経済学とは全く別の体系を構築することであった。彼は、『新原理』においてその目的を達成できたと確信し、次のように述べる。

「私は、あるいは全体の所得の決定によって、あるいはまた、国民に最大の幸福をひろめ、その結果この学問の目的をもっともよく達成させる所得分配の研究によって、経済学を新しい基礎の上においたと信ずる。」⁴⁰⁾

本稿はシスモンディによる経済学の「新しい基礎」が体系的に再構成され得るかどうかを検討したのである。

参 考 文 献

- [1] Arena, R. "Réflexions sur l'analyse sismondienne de la formation des prix." *Revue Économique*, n° 1, janvier, 1982.
- [2] Beaugrand, P. "Sismondi, théoricien à-monnaie." *Revue d'Économie Politique*, t. 93, n° 2, 1983.
- [3] Grossman, H. *Simonde de Sismondi et ses théories économiques*. Varsaviae, 1924. (『シスモンディの経済理論』, 吉田静一訳, 神奈川大学『商経論叢』, 10巻1号, 3, 4号, 1974—1975年。)
- [4] Lutfalla, M. "Sismondi, Critique de la loi des débouchés." *Revue Économique*, t. 18, n° 6, 1967.
- [5] Malthus, T. R. *Principles of Political Economy*. 1st edn. 1820, 2nd edn. 1836. (マルサス『経済学原理』, 小林時三朗訳, 岩波書店, 1968年。)
- [6] Marc, M. S. "Sismondi et les déséquilibres économiques." *Économie et Sociétés*, t. 10, n° 6, 1976.
- [7] Parguez, A. "Sismondi et la théorie du déséquilibre macro-économique."

39) したがって、マルサスの『経済学原理』は、シスモンディの『新原理』の翻訳ではなく、全く異質の著作であると見るができる。

40) Sismondi [9], CL版, p. 56.

Revue Économique, t. 24, n° 5, 1973.

- [8] Parguez, A. "Un essai de théorie générale de la croissance: les modèles sismondiens d'accumulation." *Économie et Sociétés*, t. 10, n° 6, 1976.
- [9] Sismondi, J. C. L. *Nouveaux Principes d'Économie Politique*. 1e éd. 1819, 2e éd. 1827. (シスモンディ『経済学新原理』, 吉田静一抄訳, 神奈川大学『商経論叢』, 11巻3, 4号—12巻4号, 1975—1977年。)
- [10] Sismondi, J. C. L. "Examen de cette question: Le pouvoir de consommer s'accroît-il toujours dans la société avec le pouvoir de produire?" *Annals de Législation et de Jurisprudence*, t. 1, Genève, 1820. (Repris dans 2e éd. des *Nouveaux principes d'économie politique*, 1827.) (「生産と消費の均衡について——リカード氏の入門弟に反論する」, 斉藤佳信訳, 平瀬巳之吉編『経済学・歴史と現代』, 時潮社, 1974年。)
- [11] Sismondi, J. C. L. "Sur la balance de consommations avec les productions." *Revue encyclopédique*, t. 22, 1824. (Repris dans 2e éd. des *Nouveaux principes d'économie politique*, 1827.)
- [12] Sismondi, J. C. L. *Etudes sur l'Économie Politique I-II*, 1837-1838.
- [13] Sowell, T. "Sismondi, A Neglected Pioneer." *History of Political Economy*, vol. 4, no. 1, 1972.
- [14] 置塩信雄『蓄積論』筑摩書房, 1976年。
- [15] 吉田静一『フランス古典経済学研究』有斐閣, 1982年。